

神千鶴子
たかつた
り行く

女きといふこと
 どれほどの時が 流れたのだらう
 一緒にいたいと思つた時
 自転車の後部に そのまま乗つていたかつた
 別れたくないと思つた日
 ふと触れた手を離したくなかつた
 細い雨が降りはじめ
 ひとり行く 肩に降りはじめ
 ふり仰ぐ木々の枝先から
 緑の雨が頬に落ちて
 雑木林の中を繞く 細い道を ひとり行く
 青く光る空の 夏は 悲しく過ぎた
 どれほどの時が 流れたのだらう
 消えしまつた林の中の道を ひとり行く
 ひとり行く肩に 雨が降りはじめ
 白い雨が 頬を濡らす
 大神さん、連とタイトルを行つたり来たり
 しながらこの詩を読む、詩の持つ良さが
 じわがじわと。三つの雨に時間の流れが重